

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援 えほんの木 相生山		
○保護者評価実施期間	2024年2月1日		～ 2025年1月31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	15名	(回答者数) 15名
○従業者評価実施期間	2024年2月1日		～ 2025年1月31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	10名	(回答者数) 10名
○事業者向け自己評価表作成日	2025年1月31日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	職員体制と支援の質の両立▶ 職員の配置が適切で、日々の支援を記録・振り返りしながら、研修によるスキルアップにも取り組んでおり、支援の質が高い体制が整っています。	<p>日々の朝礼・帰りの会を通じた情報共有 → 支援開始前後に職員間で打ち合わせを行い、子ども一人ひとりの状況や必要な対応について確認・振り返りを徹底しています。</p> <p>業務日報の活用による記録と可視化 → 勤務日が空いても支援の継続性を担保できるよう、個別の状況を日報で共有。</p> <p>外部・内部研修の積極的な紹介と参加支援 → 職員に研修の機会を提供し、専門性の向上を日常的にサポート。</p> <p>支援計画の見える化・共有 → 個々の支援計画をスタッフ全体で確認できる体制づくりを進め、支援の質を保っています。</p>	<p>支援計画の可視化をさらに推進し、「計画→実践→振り返り」が循環するツール(例:共通フォーマット、デジタル共有システム)の整備</p> <p>パート職員を含む全員がチームで学び合う場(例:ミニ研修、ケース共有の時間)の定期化</p> <p>若手・新規職員向けのOJTとマニュアルの体系化により、質の安定と負担の偏り解消</p>
2	保護者との連携と信頼関係▶ 日々の送迎時や面談を通して、保護者との対話を大切に、意向を反映した支援や相談対応を実施しており、信頼される関係性が築かれています。	<p>送迎時のコミュニケーションを大切に → 短時間で日々の子どもの様子を伝え、信頼関係の構築につなげています。</p> <p>面談や電話、連絡帳など多様な方法で保護者とやりとり → 対面以外の手段も積極的に活用し、子育ての悩みやニーズに柔軟に対応。</p> <p>保護者の声を支援内容や運営に反映 → アンケートや日々のやりとりを通じて保護者の意向を把握し、支援に反映する文化が根付いています。</p>	<p>保護者との1対1の面談機会を年数回以上確保し、より丁寧なフィードバックと協働関係を育む</p> <p>「子育て講座」や「ミニ保護者会」など、保護者同士が安心して交流・相談できる場の企画</p> <p>HUGやSNSなどの情報発信を「定期化」し、見える運営・安心の提供につなげる</p>
3	安心・安全な環境づくりと地域交流の意識▶ 安全対策として定期的な避難訓練やヒヤリハット共有が徹底されているほか、地域や異年齢の子どもとの交流も積極的に実施されています。	<p>避難訓練は「近くの避難所まで実際に歩いて行く」など実践的に実施 → 子どもたちが自然に防災を学べるような形で取り組んでいます。</p> <p>ヒヤリハットの共有と職員間の情報連携 → 事例集の作成・共有により、未然防止や対応力の向上を図っています。</p> <p>異年齢や地域の子どもの交流機会の創出 → 「風の子」などの行事を通じて、地域社会とのつながりを大切にしています。</p> <p>SNSやHUG(配信アプリ)を活用した保護者・地域への情報発信 → 定期的ではないながらも積極的に施設の様子を共有しています。</p>	<p>安全面に関するマニュアル類の職員共有と定期的な確認会の開催(例:月1回リスクミーティング)</p> <p>地域の園・学校・子育て支援施設との連携強化(例:見学受け入れ、合同活動の提案)</p> <p>地域住民やボランティアを招いたイベント開催など、地域に開かれた運営の具体化</p>

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	<p>施設設備・バリアフリー環境の課題</p> <p>▶ 背景・リスク：建物構造上の課題もあるが、バリアフリー未対応の箇所や、生活導線の使いづらさが保護者・子ども双方にストレスとなっている可能性がある。</p>	<p>建物の構造的制約</p> <p>→ 賃貸または既存建物を活用しているため、バリアフリー化が難しい部分（例：階段、手洗い場の高さ）が物理的に残っている。</p> <p>設備改修にかかるコスト負担の大きさ</p> <p>→ トイレの増設、洗面所の改善、暖房設備の追加などが必要だが、予算上の制限で後回しになっている。</p> <p>日常の運営に追われ、利用者目線の細かな不便が見過ごされがち</p> <p>→ 職員の工夫（例：抱っこで対応、柵内での医療ケア）でカバーしているが、根本的な解決には至っていない。</p>	<p>「できることから始める」視点での小規模な改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 滑り止めマットの設置</li> <li>- 洗面所に踏み台や足場を整備</li> <li>- おむつ替えスペースに簡易暖房やカーテンを設置</li> </ul> <p>保護者アンケートで利用者目線の不便を再収集し、優先順位を明確化</p> <p>→ 「一番困っていることは？」という視点でヒアリングし、改善内容を段階的に整理。</p> <p>行政や地域助成金の活用を検討</p> <p>→ バリアフリー改修や設備投資に使える補助制度を調査し、可能な範囲で申請。</p>
2	<p>支援内容の可視化とスタッフ間の連携不足</p> <p>▶ 背景・リスク：社員中心の運営体制に偏っており、チームでの支援立案・振り返りの仕組みが限定的。</p> <p>支援の一貫性や質の担保に影響が出る恐れがある。</p>	<p>チーム連携の時間確保が難しい勤務体制</p> <p>→ シフト勤務や短時間勤務の職員が多く、全員が集まってプログラムを練る・振り返る時間の確保が難しい。</p> <p>役割分担が属人的になっている</p> <p>→ 一部の社員に業務や判断が集中しやすく、「一人で抱えてしまう構造」が固定化。</p> <p>マニュアルや支援計画の共有手段が整っていない</p> <p>→ 個々にはしっかり支援していても、「見える化」や「共有しやすい仕組み」の不足により、他職員の支援内容が把握しづらい状況。</p>	<p>業務分担や役割を「チームで支える」仕組みへ見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 活動プログラム作成・見直しを「一人の担当者任せ」にせず、毎月1回でも全体で共有・意見交換する場を設ける。</li> <li>- リーダーや中堅スタッフに「伴走役」をつけ、OJT体制を整備。</li> </ul> <p>支援計画や日々の記録の「見える化」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 共有ノートやGoogleドライブなどを活用し、他職員も内容を把握しやすくする。</li> <li>- 「ふりかえりシート」など簡易フォーマットを活用し、記録と学びを循環させる。</li> </ul> <p>ミニ研修やケース共有会を月1で実施（20分でも可）</p> <p>→ 忙しい中でも「立ち止まって話す」習慣をつける。</p>
3	<p>地域・他機関との連携や移行支援の弱さ</p> <p>▶ 背景・リスク：地域や次のステージ（保育園・学校）との連携・引継ぎが見えづらく、移行支援や社会とのつながりの広がりに課題。</p> <p>地域に開かれた運営・啓発活動の機会も限られている。</p>	<p>外部とのつながりを担う役割が不明確・人手不足</p> <p>→ 移行支援や見学対応を行う際に「誰がどのように動くか」が決まっておらず、対応が属人的。</p> <p>地域連携の優先順位が後回しにされやすい</p> <p>→ 日々の支援や保護者対応に時間を取られ、積極的な地域交流や移行支援の企画に時間を割きにくい。</p> <p>地域側（園や学校）との関係構築に時間がかかる</p> <p>→ 担当者が変わったり、保護者経由での連絡になるなど、継続的なパイプができていない。</p>	<p>「連携担当（つなぎ役）」を明確にする</p> <p>→ 保育所・学校との情報共有・見学対応・引き継ぎなど、外部連携を担う職員を明示し、対応に一貫性を持たせる。</p> <p>関係機関との「顔が見える関係づくり」を意識</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 小学校や園に事業所だよりやイベント案内を送る</li> <li>- 見学や情報交換の場を定期的に設ける働きかけをする</li> </ul> <p>地域に向けた「開かれた運営」の一歩として、発信を強化</p> <p>→ SNSやHUGなどを活用し、活動内容や思いを発信（定期的・簡潔でもOK）</p> <p>→ 年に1回の「開所イベント」や「見学Day」なども視野に</p>